

高田保馬の人口論

Yasuma Takata's Population Theory

牧野邦昭 (慶應義塾大学)

Kuniaki Makino (Keio University)

高田保馬 (1883-1972) は戦前の日本を代表する理論社会学者及び経済学者である。高田の社会学および経済学では人口が大きな位置を占めるが、高田はマルサスの人口論には否定的であり、またマルサスに始まる過少消費説にも否定的であった。

ただ高田は商品の過剰をなくし経済成長を引き起こすためには人口増加が不可欠であると考えていた。人口増加が需要増加をもたらす、需要増加が生産の拡張を引きおこし、生産の拡張は資本の増加を必要とする。資本増加のためには需要の増加と労働供給の増加が必要になるがこれは人口増加によって満たされる。したがって資本の増加と人口の増加は並行して進み、人口と資本の増加はそれぞれ需要と供給の増加を意味する。高田はこうした人口と資本の同じ速度での成長が「均斉的動態又は動くところの均衡」になることを主張した。こうした考えは現在のマクロ経済学の新古典派の経済成長理論を思わせる。

その一方で高田は人口増加が生存資料によって制約されることも認めている。人口増加を制約するものは生産力そのものではなく「階級関係によつて分配せられたる生存資料」である。高田自身の表現を使えば以下のように表せる (『人口と貧乏』1927年)。

$$\text{生産力} \times \text{分配係数} = \text{階級人口} \times \text{生活標準}$$

人口が一般的に不断增加する場合は上記の「人口方程式」の均衡が釣り合わなくなるが、生活水準と分配係数は「社会勢力関係」「力の欲望」によりなかなか変化しない以上、人口増加に伴い生産力が増加しなければならなくなり技術進歩が行われ、生産力の「飛躍的増加」が起きる。それにより発生した余剰は生活標準を高めるのに使われるが、人間の持つ「力の欲望」により余剰が使い尽くされる一方、人口は不断增加するので再び人口圧力が生じる。こうして人口増加→技術進歩→生活水準上昇→人口増加…という循環が生まれる。これが繰り返されて「生産力の発達と人口数量の膨張、他方に於ては高き生活標準」が実現する。

「人口増加圧力が経済発展を促進する」という主張は高田の独自の考えではないが、当時の「過剰人口が日本経済の停滞の原因である」という支配的な考えを批判するものであった。

ところで、ここでいう「生産力」は人口を直接制約するものなので実物資料と考えれば、一つの階級の人口は前掲の式を変形して以下のように表すことができる。

$$\text{階級人口} = \frac{\text{生産力} \times \text{分配係数}}{\text{生活標準}}$$

この式から、もしある階級の人口を増加したい場合には、生産力を増加させるか、その階級の分配係数を増加させるか、または生活標準を下げる必要がある。

高田は人口に関する理論的研究だけでなく実証的な研究も行い、利益社会化の進んだ東京や大阪のような「近代的大都会」では富者の方が出生率が低くなるとしている。また高田は徴兵制度が日本の人口に与えた影響についての研究で、徴兵により出生率が大きく減少するのは農村部であることを示している。徴兵制度を離れて一般化すれば、こうした事実は農村からの若年層の人口流出により日本全体の出生率が減少することを意味する。

上記のように人口の増加は文化的・経済的発展をもたらすが、逆にいえば人口減少は衰退をもたらす。したがって人口が減少し衰退する上層階級と人口が増加し発展する下層階級との間ではやがて階級の逆転が起き、「階級の周流」が実現する。高田は上層階級をヨーロッパに、下層階級を日本に見立て、日本の人口を増加させていくことで人口の停滞するヨーロッパにとって代わるべきであるとする「民族周流論」を主張し、さらに芋を主食とするなど生活水準を引き下げて人口を増加させていくことを主張して河上肇と論争を繰り広げ、さらに人口増加の中心である農村を維持していくための国土計画の重要性を訴えていく。こうした高田の主張は昭和初期には顧みられなかったが、戦争の中でやがて時代の方が高田に追いつく結果となり、高田は人口増加と耐乏生活のイデオログとなっていった。